

「本質と関係 谷と小泉」

栗本 慎一郎



は面白くかつ恐ろしいものだと思っている。

その私が、今、昔からの友人のこいつが歴史的に大変な存在になるかもしれないという危機感を増大させていることがある。そして

世間の評価が私の観察データとは全く違うという違和感。感触も強い。それは言うまでもなく、首相・小泉純一郎のことである。

彼のおかげで日本の経済や政治についての私の予測はこの二、三年極端に精度が上がった。私は彼の大学の同級生であって、普通と違って学校卒業後も仕事の付き合いをした仲間だ。卒業二十数年後から同じ仕事場で七年、そのうちの三年は一見「同志」として濃密に付き合った。たとえ人間研究者でなくとも何かは言える立場だろう。でも私はここまで、一切コメントを断ってきた。変に政治的に利用されるのが嫌だったからである。それでも、今私は、国民が彼をヒットラーのように押し上げる危険があるなと思って本を書き始めた。題して「ヒットラーの同級生」、良い題だろう。大宰相の性格はもう個人の問題ではない。ちゃちだったはずの仲間がとんでもない存在になることはあるものだ。つまりこの題は、かのヒットラーが総統になったとき小学校時代の同級生はそんなことを密かに思っていたに違いない、という趣旨なのである。

(東京農業大学教授・東京都)

私は、現在は大学教授だが、実にさまざまな分野の仕事を経験した。国会議員、小政党の代表幹事、売れない評論家、やはり売れないタレントなどである。ここで無名の作家と売れない歌手の分はどうしたと野次られる人はよほどの栗本通である(見逃してくれっ!)。評論家としてもその分野が実に多様(音楽

だけはない)だった。政治家として与党にいたことはあるが、評論では常に非主流派にいた。分野が多様な理由は、「いい加減だからだ」というのがまずは定説みたいだが、自分では認められない。主流の連中がまともな評論、批評を展開していれば、私だって特に口を挟む気はなかったのだ。

だが別にも最大の分野拡大の理由があった。それは、私は仕事より人が好きで人間観察が好きだったということである。それまで知らなかった分野に足を踏み込むと、いろいろな人に出会えた。そこでさまざまな人間研究が出来た。それこそが私のフィールドがオーバーフローした最も大きな原因である。かくて私に人物論用データを蓄積されてしまった人は数限りなくいる。だが、私は意外

にもゴシップ好きではないから、ほとんどの人は何も書かれる心配はない。特に、小、中、大と一緒にだった谷哲夫前荘銀総研社長は大丈夫である。小学校時代、母上が彼のために買っておいたお煎餅をほとんど私が食べてしまった借りがあふ。まずい話は、墓場まで持つていく。

ところで人間観察者としての私には、多少の哲学がある。それは、本質とか実体とかが最大の問題ではないと思っていることだ。人物研究上大切なのは、その人物がどういう問題にどういう対処をしたかということ、つまり関係のとりの方の分析である。人はたとえ表面の性格は変えられても、諸事との関係のとりの方の基本は変えられないのだ。これは難しく言えば、人物を考える場合、その人による構造の中の位置取りが重要だということだ。もっと難しく言えば、実存的本質より関係的構造が重要だということだ。その上で諸般の条件が相乗的に作用するとどう結果が出るかというのが人物を考える上での面白さである。めったにないがひどく恐ろしいことが予測されてくる場合もある。全く人というもの